

学生会員の 声

●オンライン開催の学会を経験して●

私は現在、修士2年として化学工学を専攻しており、微粒子を用いた新規材料の開発をテーマに研究をおこなっています。また、来年度からも同じ研究室で博士課程に進学する予定です。そのため1年前の私は、研究室に行き実験をおこなったり、大学院の講義を受講したりという「当たり前」の生活がこれからもしばらく続いていくのだろうな、と漠然と想像していました。しかし実際には、私たちの置かれた環境は「当たり前」から大きく姿を変えることとなりました。振り返ってみても、2020年は私たちの普段の生活や考え方を一変させる、そういう年だったように思います。修士2年に上がる3、4月頃から、私たちの身の回りに様々な制限が課せられるようになりました（マスクの着用、移動や会食の自粛が求められるなど）。勿論それらの制限も厳しいものでしたが、大学に立ち入ることができないという制限は、私たちが研究活動をおこなう上で大きな打撃を与えたように思います。研究室へ行くことができないため実験が進められず、またディスカッションや講義といった、これまで対面でおこなわれてきたものがすべてWeb会議ツールを利用したオンライン上のものへと置き換わっていきました。今までのようにいかないことばかりで歯がゆい思いをしたのは私だけではないと思います。時間が経ち、現在は少しずつ制限が緩和されてきていますが、それでも1年前の私が想像していたような「当たり前」の生活と今の生活は大分かけ離れたものとなっています。

しかし驚くべきは人間の適応力というものでしょうか。そのようなオンラインでのやり取りに私たちは順応し、うまく利用し始めていると感じています。最初こそ戸惑う部分も多かったですが、最近ではあまり不便に感じることも無くなってきました。むしろ少し内密な話をしたいときや共有したい資料が多いとき、そして勿論離れた場所にいる人とやり取りするときなどは、これまでよりも便利に感じます。何ごとにも慣れ、ということなのかもしれません。

特に本稿を執筆している現在、記憶に新しいのはオンライン化して開催された化学工学会の第51回秋季大会です。春頃から年會を始めとして様々な学会が中止となっていた中、オンラインでの開催ではありますが秋季大会が開催されたことは本当に良かったと思います。今回の秋季大会には私も口頭発表にて参加させて頂いたのですが、自らの発表やポスター聴講等を通じて、従来と同様に多くの先生方や企業の方、他大学の学生と意見を交換することができたと感じました。ただし今までの学会とは異なって、自分の声はきちんと届いているか、プレゼン資料はきちんと見えているかなどについて気に掛けてしまう部分もあり、これはオンラインに特有の悩みだと感じました。しかしデメリットだけでなく、オンラインの方がこれまでよりもやり易いと感じる部分もありました。例えば発表者としては、今までの学会発表に比べてあまり緊張せずに発表に臨めたと感じます。発表の際、実際に登壇して人前で話すというのはやはり緊張を伴うものだと思います。しかし今回の秋季大会では慣れた場所から発表をおこなうことができ、また発表中に人の視線を感じることもなかったため、良い意味でリラックスして臨むことができました（人の視線を感じないことは逆に反応が読み取りづらいということで、やりづらいという意見も聞きますが）。また聴講者としては、セッションごとの移動がやり易かったと感じました。実際に会場まで移動する必要がなく、また聞きたい発表のある部会へすぐに移ることができるのは時間の節約という意味でありがたかったです。このように、オンラインならではのメリットは確かにあると思いました。

おそらく、これからしばらくは学会等も今回同様オンラインでの開催が主流の状態が続いていくでしょうし、出張等の研究室の外に出る機会も制限される状況だと思います。しかしそのような環境下でも新しく得られる発見は確かにありますし、オンラインならではの強みが活かせる場面もあるのではと思います。災い転じて福と成すという諺もありますが、現在私たちの生活様式は大きな転換期を迎えています。1年前の私が想像していた生活様式とは異なりますが、今の私たちにできるのは新しい生活様式の良い部分を見つけ、慣れていくことだと思います。私もこれからの研究活動に際して、オンラインでの取り組みとオンラインサイトでの取り組みをうまく繋ぎ、これまで以上に実りある研究生を送りたいと思います。

最後になりますが、今回寄稿の機会を頂けたことは大変貴重な経験となりました。今回の寄稿にあたってお世話になった皆様には深く感謝申し上げます。

（東北大学大学院工学研究科化学工学専攻 波形 光）